北を語る

秋 2002.10 No.18
北を語る会
代表 渡會純价
事務局 札幌市東区北33条東6丁目2-28
㈱サン設計事務所内
TEL (011) 753-1622
FAX (011) 742-1888
印刷所 東陽プリント株式会社

最初で最後の札幌高架地下鉄

内田康道

今や北方圏の拠点都市として成長し続けている北の都札幌ではあるが、さかのぼること昭和36年頃は急速なモータリゼーションの発展と相まって、特に冬期間におけるラッシュ時は市電、市バス共に飽和状態に達していた。(降雪ラッシュ時は札幌駅から薄野迄市電が数珠状態)

交通局として将来の都市交通網計画の策定に着手、市議会からは「本市独自の交通計画を早急に樹立されたい」旨、意見書の提出もあり、早速冬場対策を念頭に次世代交通機関として、トロリーバス、モノレール、地下鉄等の具体的検討を開始したのが昭和38年である。

当時人口70万そこそこの中小都市であった札幌は、膨大な建設費のかかる地下鉄より低廉なモノレールを主軸に計画を進めていた矢先、大刀交通局長、海外視察の折りに、パリでゴムタイヤ地下鉄に初乗車「これだ」の感銘を受け帰札後、将来の札幌交通機関は、ゴムタイヤ方式地下鉄で行く方針を発表した。

ゴムタイヤであるが故、振動、騒音防止効果は、モノレールと同様だが地下鉄建設費はモノレール高架方式に比べて2倍強であるため、建設費負担を少しでも軽減するべく都心部(環状街路内)は地下で、郊外は高架とした建設計画を決定した次第である。

しかし、建設費低廉化もさることながら、地下鉄認可

白鉢のごときシェルターと札幌ドーム 藻岩山山頂より

兵役拒否の若者達－加害者にも被害者にもなることを拒否する

横　路　由美子

ＮＨＫのＥＴＶ特集でイスラエルの18歳の青年が兵役拒否をしたことを、そしてその友人達61人も加わって大きな輪になっていることが数ヵ月前に報道されたことがある。イスラエルでは、18歳になると、男子は３年、女子は１年９ヵ月の兵役義務がある。兵役を拒否すれば収監され、その後の不利益は予測できない。

あの激しい憎しみのパレスチナとイスラエルの戦闘、自爆テロ、報復のるつぼの中で、兵役を拒否する勇気。青年達の親の世代は、ユダヤ人の迫害、流浪の旅、イスラエルの建国という経験を経ているだけに「国を守ることに命も惜しまぬ」という信念の持ち主が多い。したがって子供たちが兵役拒否を貫くには、社会的圧力だけでなく、家庭内の闘い、兵役拒否者を出した家庭の社会との葛藤まで汲み取り頑張っていかなければならないことが想像される。

兵役拒否までもいかないが、軍の中の兵隊が、パレスチナの暫定自治区ガザに進駐することを拒否する運動も広がりを見せている。先日、イスラエルの強硬派で知られる軍の指導者が、お膝元の軍の中にこのような軍務拒否の動きを黙認する発言をしていたのには、いささか驚いた。

アメリカでも、クエーカー教徒をはじめ良心的兵役拒否をするグループがある。厳しい社会状況の中で「非国民」とののしられ迫害を受ける立場になろうとも自分の意志を通して、反戦を貫くことの難しさは容易に想像できる。昨年の９・11のテロの際、アメリカ上下院全議員の賛成を求めた「テロへの報復に関する軍事行動」にもきちんと一人の女性議員　バーバラ・リーさん　が反対し、民主主義の存在をかろうじて示すことができた。「非戦」のＴシャツを着て登校した女子高校生も、その議員と同様、巨大な圧力を感じたことだろう。

先月の朝日新聞に、神戸大学のアレキサンダー教授が「ユダヤ人として言わせていただく。私の名においての暴力はごめんだ！」と書いていた。彼のユダヤ系の祖母は13歳の時１人でラトビアからナチスの迫害を逃れて渡米した。ホロコーストによって、ラトビアに残っていた家族は殺され村は地図から消えた。祖母たちは苦しく悲しい経験を通して自由と平和、寛容の尊さを学び、次の世代に教えた。アレキサンダー教授によると今年初めシカゴのユダヤ人を中心にNIMN（ノット・イン・マイ・

かたみに人の血を流し
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこころの深ければ
もとよりいかで思（おぼ）されむ

ああをとうとよ戦ひに
君死にたまふことなかれ
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへるは母ぎみは
なげきの中にいたましく
わが子を召され家を守（も）り
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる

暖簾（のれん）のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を
君わするるや思へるや
十月（とつき）も添はでわかれたる
少女（おとめ）ごころを思ひみよ
この世ひとりの君ならで
ああまた誰をたのむべき
君死にたまふことなかれ

ネーム）運動が始まったという。イスラエルが「ユダヤ人の名において（イン・アワ・ネーム）」パレスチナ人に行っている暴力に、ノット（NOT）を着けて個人として否定する運動である。

ドイツで兵役を拒否した若者が、日本の町田市の社会福祉法人『共働学舎』で代替勤務（ZIVI）として働いている場合もある。「武器を取って人を殺すより、助ける方がずっといい」と語る若者。

日本でも戦前戦中を通じて反戦、非戦で戦った人々がいることを忘れてはならない。横路の母の兄である野呂栄太郎は、「日本資本主義発達史」を書いた経済学者であるが、1925年（昭和元年）に作られた治安維持法で逮捕され、品川警察署で死亡している。三浦綾子の「銃口」を読むまでもなく、綴り方教室運動でたくさんの教師が逮捕されたことなど記憶している人は少なくないと思う。

今改めて、1904年「明星」に掲載された与謝野晶子の「君死に給ふことなかれ」（下に全文を掲げる）を読むと、日清、日露と続いた戦争で、日本が明治維新を経て、列強に肩を並べようと遅れ馳せながら植民地分割の仲間入りに意欲を見せた時期に、あのような歌を世の中に出した勇気に敬服する。日露戦争に出兵し激戦地旅順に赴いた弟を案じた歌であるが、読めば読むほど深い反戦歌であることがわかる。戦争の被害者になることだけでなく、加害者になることも否定する、そして天皇制のもとでの兵士の位置もアイロニーをこめてきちんと見ていることに、与謝野晶子のただ人ならぬ感性を感じることができる。

有事法制が国会日程に上っている時、もう一度、第二次世界大戦が終った時、国民が抱いていた「もう二度と戦争はいやだ」というあの思いを思い起こし伝え合わなければならないと思う。どの戦争も、前線に出て犠牲になるのはいつも庶民である。そして、過去の歴史から学べば、「有事」が陸軍の手で故意に作られたり「戦果」が捏造され国民も一般兵士も真実から程遠い情報に躍らされていたことが、ようやく白日のもとに語られるようになってきた。最近では湾岸戦争の報道が宣伝会社で作られて戦争プロパガンダに巨大プロジェクトが組みこまれていたことを指摘する本も出版されている。アメリカ有事と直結する周辺事態法のもとで「有事」が決定される構造の恐ろしさはもちろん、有事という脅しの下に、自由や人権が蹂躙される体制が整備されていくのは明白である。石油産業と軍需産業の後押しを受けるアメリカのブッシュ政権追従をやめて、日本は武力による紛争解決を憲法上も否定している誇り高き国であることを、外交の基本にすべきである。小さな孫達を見ていると、この子たちが、戦争に巻き込まれることが無いようにと祈らずにいられないし、そのために、私たちの世代のやるべき仕事が残っていると思う。

君死に給ふことなかれ

与謝野晶子

ああをとうとよ君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生まれし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃（やいば）をにぎらせて
人を殺せとおしえしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや

堺の街のあきびとの
旧家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとても何事か
君知るべきやあきびとの
家におきてに無かりけり

君死にたまふことなかれ
すめらみことは戦ひに
おほみづからは出でまさね